山とスキー

第八十一號

札幌　山とスキーの會　發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和三年四月廿八日印刷納本

昭和三年五月一日發行
（毎月一回一日發行）

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第八十一號目次

記事

大島君を憶ふ　伊藤秀五郎　（一）
トムラウシ岳　板橋卓　（五）
第二回冬季オリンピック大會　伴素彦　（三）
春の Paradies Hütte に於ける Training　村本金彌　（一九）
海外通信　廣田生　（二五）

寫眞版

Sigmund rund
十勝より上ホロカメトクを望む

昭和三年五月發行

十勝より上ホロカメトクを望む

大島君を憶ふ

伊藤秀五郎

昭和三年三月二十五日は、まことに我國の登山史上、最も悲しむべき日であつた。その前穂高北山稜での大島君の墜落を新聞で知つてから十日間程といふものは、暗然心塞がれて、欝々として殆んど何も手につかない日を送つて了つた。私は、人の死に依つてかくも酷く心を打ちひしがれた經驗は、今迄にもなかつたことだ。これは獨り私のみに限られたことではなく、恐らく我國の登山家にして多少なりともかゝるショックを蒙らなかつた人はあるまいと思ふ。私にしても既にさうであるからには、大島君と最も親密な關係にあつた三田登山會の人達や、當時のベグライターたりし本郷・横・齋藤諸君の心事は察するに餘りある。大島君の死は、我國山岳會にとつて餘りにも大いなる損失である。それは紙筆を以つては到底盡すことの出來ない含楚であり擯標である。運命とはいへ、私はしばらく天に悵怏せざるを得なかつた。煊妍たる春の光も　曠朗たる春の氣も、空しく虚曠の鐘を響かせるに過ぎなかつた。――漠然紙に向つた私は、四月十四日の告別式に讀むべき弔辭を、「君は吾國登山界の柱石にして、將來吾が山岳界を雙肩に擔ふべき重望を有てり」といふ言葉で書き始めた。また、「君、登高精神の眞摯なるマンマリーに及び、自然觀照の靜觀的なるノーマン・コリーを偲ばせ、詩藻行文の豊なるエミール・ジャベルを凌ぐ。宜なり、我等後進、君を敬慕するの情蒼海の深きに及び、人、君を稱して天才

的登山家といふは。」とも書いた。しかし如何に稱讃と歎咤の言葉を列ねても、君は已にかの巉岏たる穂高の谿深く永遠に眠つて了つたのだ。

大島君の十數年間の登山生活は、君にとつて誠に何者にも換へ難く貴重なものであつたに違ひない。しかしそれは全く大島君自身に屬するものだ。大島君が我國登山界に甚大な稗益を與へたのは、質に於ても量に於ても極めて豊富な、權威ある多方面な研究記錄と、天性の麗筆になる紀行文を通じての、登山に於ける形而上學的な方面、言ひ換へれば登高精神或は山の登り方といふ樣なものに於てである。「山とスキー」誌上發表されたもののみに就て數へてみても「山への想片」「峠」等から譯詩・譯章等の斷片迄すれば、實に數十編の多きに及んでゐる。近くは、大編「登山史上の人々」を連載された。更に最近一ヶ年に汎る浩瀚なる文章送稿の約もあつたといふことである。大島君は「山とスキーの會」の會員ではなかつたけれども、本會の今日ある、また君に負ふところ極めて多いことは言ふを俟たない。

大島君が、我國唯一の登山史家であり、雪崩研究の權威であつたことは何人も認めるところであるが、私はまた、彼は恐らく現代の最も優れたる紀行文家或は自然文學家であり、更に洗練されたる感覺をもつた詩人であると信ずるのである。山登りの上について私達——私の大島君から享けたものは甚だ深いものがある。私はこゝに、大島君と私との私的交渉を少しばかり書き加へたいと思ふ。

私が始めて大島君に會つたのは、私が「山とスキー」の仕事をしてゐた大正十三年の四月、三田幸夫君と一緒に櫻川町の大島君の家を訪ねた時であつた。その時は、たしか大島君達は、穂高岳のスキー登山に成功して歸つた時であつたと記憶する。私の大島君から享けた第一印象は、如何にも潑溂たる登山家に似つかはしい立派な體格の所有者であるといふことであつた。大島君に依て殘されたあの偉大なる登山記錄は、確に彼の强健なる身躰にも多く據るところがあると思ふ。その時もかなり長く話をしたが、冬と春を知らない北海道に、是非雪のある時に一度行きたいと言つてゐた。これは、それから後に會つた時にも、何時も必ず言つてゐた大島君の年來の希望の一つであつたのだ。その希望は遂に今日まで達せら

れる機會がなかつた譯だが、ほんとうに殘念なことである。一度大島君に、冬の、春の雪解の、北海道を歩いて貰ひたかつたと考へるのは私一人ではないと思ふ。大島君は北海道が好きであつた。その事は、大島君自身度々書いてゐるところである。私が、北海道の山を理解して、愛する樣になつたのも、大島君に暗々のうちに影響されたところがあると思ふ。

大島君が一年間の軍隊生活を終へた年、即ち大正十五年の五月にも北海道の山へ來る筈だつた。その時は、大島君と軍隊で親しくなつた林科の山井君と私と三人で、雪のある知床半島を歩いてみる筈だつた。しかし私は急に北千島の阿頼度島に行くことになつて了つたし、大島君も何か都合が惡くなつて、此の計畫はその儘になつて了つた。だから私は、大島君と一緒に山へ行く機會は一度も持たなかつた譯であつた。今年の夏も日高の山を歩きに來るといふことであつたが—。

私は、歸省する度に大抵大島君と會ふ機會を得たことは大へん有難いことであつた。大島君はまた後輩に對する友情の極めて厚い人だつたから、私など直接啓發されるところは少くなかつた。去年の三月に會つたのが最後であつたが、その時大島君は、こんな事も言つた。

「日記をしらべたら、軍隊を出てからの一年は、殆んど半分即ち百幾十日かを山で暮したことになるよ。」

大島君の山への熱情は今更書きたてる迄もないが、しかし一年の半分を山で送れた大島君は、山的には甚だ惠れた環境に在つたといふことも出來よう。尤も今年の四月からは、更に一學究徒として、慶大の經濟學教室に、はへることに決つてゐたさうであるが。そして大島君は、この事を大へん期待してゐたさうである。大島君はまた、人類學や言語學にも深い興味を感じてゐたが、恐らく將來一方には有爲な經濟學者としても、學界に重きをなしたであつたらうに——。

兎に角、その熱烈なる登高意欲といひ、研究心といひ、その優れたる語學力といひ、また實際の境遇や、躰力の上からいつても、山的に大島君程立派な條件を具へた登山家といふものは、恐らく、今後もなかなか出來るものではないと思ふ。大島君自身は、遂に、彼の常に憧憬おく能はなかつたマンマリーを、彼自身の上に實行して了つたけれども、後に殘されたものの寂しさは、——これは決して單なるサンティマンタリズムではない。我國の登山界にとつて、ほんとうに何とい

3

つても取返しのつかない大きな損失であつた。

それからまたその時に私は、それ迄の大島君の文献を、單行本に纒める樣に薦めた。さうしたら大島君は

「さうかなあ、やつぱりそんなに思つて吳れる人もあるのかなあ。皆んな（登高會の人達を指す）もさう言つてくれるんだが。——いつかは出すよ、しかし出すからにあ立派なものにしたいからな。」

と謙遜して言つた。これも出れば遺稿集といふことにならうなどとは、全く誰だつて夢の樣だ。

山登りの上に於て、今迄に私は二つの不幸をもつてゐる。その一は、私の最も尊敬する板倉さんと相識る機會を得なかつたことであり（板倉さんが北大を卒業した年に私は北大に入學した）他の一は畏友藤江君を失つたことであつた。

私は、今更にこの餘りにも大きい不幸を、私の山登りの思出の上に加へたことは——。しかし生前大島君と多少なり親しくしてあつたことは私のせめてもの慰である。（昭和三年四月二十日）

トムラウシ岳

板橋　卓

此の一文をもつて此の行を共にせし友におくる。

もう一年が過ぎ去らうとしてゐる。でも忘れられない。それは丁度、北の海をとざすといふ濃霧の中にたゆることなく輝く一脈の輝きなのだ。私は幾度その光に向つて突進していつた事だらう。さうして幾度あの素晴しい雪の山々に、此の瞳と此の足とをむけたであらう。「山への出途」――それはかぎりなくも、なつかしい言葉だ。そして今、見る山もない登る山もない。唯だ、生きる山だけが僕の出途に向つて祝福を與へて呉れた。痛烈な生の強張なんだ。人生の回避でも、隱遁でもない。それはむしろ、騒雜と因襲に災ひせられた人生の、山の嚴肅と單一へとの復歸であつたのだ。

數知れぬ英雄的な先輩はそれの苦惱を刻みつけて、運命と戰ひ、そして死んでいつた。蒼空に屹立する山嶺にも嵐の歸來はたえない。狂風と暴雨と雷鳴とは交々に其處をおびやかすであらう。山腹に蟄居する生物は冬の夜その尖端を旋回する吹雪の叫聲を聽くだらう、しかし沈んでゆく陽の影に山容は太古の靜けさをとりかへす。しかも何のゆるぎを見せぬその鐵色の膚は、私達に何を以つてつげるのであらう。涙に飢えたものは暮れやうとする山脈の夕映を見ろ。なほあき足らないものは溪流に終日足を浸して森から森へと歩きまはるがいゝ。水は滾々としてつきず、渴き飢えたものをうるほすであらう。

でも雪の山が慕しかつた。眞黑な針葉樹林から拔け出てあくまで白い山の尖端に立つた幻影が幾夜となくつぶつた

眼の前にちらついてゐた。その大きな手招は私を雪の山にひつぱり込まずにはゐなかつたのだ。トムラウシ行きの計畫が誘惑した。そして其晩、湯氣の濛々と立つ蕎麥をかきこみながら七人はそこだけ白い齒をむきだして愉快に笑つた。

トナカイのシュラーフザックや滅茶に澤山のフランスパン等でかさ張つたリュックをおくところもない程列車は混んだ。三月の十七日と十八日との境ひ目に札幌を立つ。初め一行に加はる筈で風邪のために行けなくなつたMの歸鄉するを一人殘して旭川に乘換へる。そして刻々に山に近づいてゆく。もう幻影でもなんでもなくなつてしまつたんだ美瑛の街から山に向つて七里の道を遮二無二にあるく。谿谷は徐ろにせばまつてゆく。四圍を低い尾根續きで取圍まれた大空の一區劃は灰色を帶びて靜まり返へつてゐる。谿谷のつきるあたり一條の白い斜面が浮び出てゐる。

俵布布——それも今は遠去つてゆくが、なつかしい響となつて響く。そのさゝやかな移住民の村の一農家（中岡安次郎氏宅）に厄介になることにする。燻つたランプをたよりに一枚の地圖を中心にして皆は顏をつきあはせる。大分長い行程だ。「だけれど、大丈夫だ。」山にむかつちやこれでも樂天家達だつた。薪に不自由のないストーブはがん〳〵と燃える。何時か、睡魔は山への興奮をも壓倒する。時々心配げに外に出たものは、空を飛來する雲をつけた。闇だそしてしきりに飛ぶ雲が何かしらの兆をもたらさずにはおかない。しかし間もなく、七人に與へられた寢室では毛皮のすき間からかはす話聲も杜絶えて、外と同じ樣な闇が此處をも領してゐた。風がとき〳〵バラックの扉をたゝく。しかしその音すらもう聞えなかつた。

三月十九日。荒蕪として雪に埋れた谿谷には早朝よりして、陰鬱な暗灰色の空と、樹梢を不氣味に鳴り響かす冷い風とが威壓してゐた。雲は低くたれこめてゐる。一日の忍從と、ふと沈んだ思ひにおそはれながら、まだ明けきらない時を、一たんとび出た寢袋の中に、またもぐりこんでしまふ。そして寢ればいくらでもねられる身体をぐつすりと横たへる。眞白い山の夢見もなく、七時までさうやつて過してしまふ。隣の室からは、たきたての飯の匂がもれてくる。寢てゝも食ひ意地だけはおさまらないつていふ連中が、そろ〳〵と袋の中からはひ出してゆく。僕も一番あとから引

きづりだされる。外に出る。山には相變らず、低く雲がこめてゐる。

八時近く村を出る。邊別川の本流に沿つて道をのぼり、途中川を渡る。川を渡つてすぐにアザラシをつける、そこの急傾斜をのぼる。のぼるとあとはゆるやかな斜面が白樺林のきれるまで續いてゐる。ラッセルが「登行精神」を發揮する。スプールがほとんど一直線をなして樹林の間をのぼつてゆく。でも登つて行くことは愉快だ。うす紅の白樺の幹と、トドマツのどつしりした樹冠はお互に美はしく交錯して、七つづゝのストックのさゝる音がさく〳〵と響く毎に、その梢からは粉みたいな雪がおちてゆく。額は何時のまにか汗にぬれた。そしてしみ〴〵とその匂のなつかしさを思ふ。けれど相當な寒さだつた。樹梢をわたつて風がなつてゆく。樹林帶をぬけ出て、硫黄岳の眞白な斜面にとつゝく。それを丹念に、ZIG・ZAGを切る。空はつひに晴れる、影すらも見せなくなつた。その白い斜面は接空線をなくして大空にとけこんでゐる。吹雪は横ざまにとぶ。黑い七つの點々が、大地と大空の境をなくした昏溟の中に小さな歩みを續けてゆく。そして一時半に其處の最高地點に立つ。四周領するものはたゞ、暴れ狂ふ雲霧の飛來のみである。その漠として、しかして鳴り響く影の外の總ての視界は、我々の眼から遠ざけられてしまつた。未だ見ぬトムラウシの山塊は彼處に聳立してゐるのだ。あらゆる情熱をかたむけても、私は彼の胸深く入り行かう。此處、千七百米の高所を叱叫する嵐に敗殘せる姿となげくな。又、明日、新しい歡喜と力とをもつて再び彼を訪れやう。烈風はとう〳〵止まなかつた。灰色につゝみかくされた中を捜索しながら大きなカーブを描いて私達は下つていつた。先頭が變な顏をして立止まる。でも又元氣に吹雪の中をとばす。そして森の中のゆるやかな斜面に出る。往きのスプールの上をスキーは快い滑走を續ける。たちまちにして吹雪の硫黄岳もかくれていつた。途中大分のびて、日没に至らずして農家に歸る。

其夜も、明日の仕度をし終つてからストーブを圍む。單純な山男供は山の話にすぐ興奮して、夜のおそいのも忘れてしまふ。誰かゞ「登行精神」といふと皆が快く笑ふ。そして明日のために充分なねむりをとることにする。

けれど嘲笑つて呉れるな。彼等にだつて一つの生存權の

主張はあるんだ。そして今は、唯、山だ。未だ見ぬトムラウシの尖頂が執拗な誘引をもつてせまつてくる。未だして其の日の黎明は、つけられてゐなかつた。しかし友よ！君は忘れないであらう。あらゆる光輝を發散して大地と大氣の沈默の上にわなゝく無數の星を。月光は更に奇蹟の樣に照りわたつてゐた。雪の面に靜かに反映するその光、そしてあそこに横はつてゐる山々のつらなり、そして私達。さあ友達、出立だ。

七人の眼が異樣な輝きに燃えてゐる。眼ばつかりぢやない、脚だつてある、腕だつてある。けれど減ず口をたたく者もゐなかつた。だまつて歩き出す。四時半、大氣は凝結してゐる。月光は雪面に凍りついてゐる。しかし邊別川を渡つて對岸の急傾斜を登る頃、陽は輝き出した。それは思ひもかけなかつた樣な快晴の一日のはじまりだつた。微紅の反映はいつしか深青色と、かはつて白樺の梢の上の方に微笑み出す。何處からともなく小鳥のチチといふ鳴聲が聞える。昨日とは大分樣子がちがふ、七人は素晴しい元氣だ。硫黄岳の東端に九時につく。一番先きのものが「ヨウー」とかなんとかいつて怒鳴ると、その聲は光つた雪面のむこうにとけてゆく。汗だ。歩みもゆるみかける。けれど晴やかな顔をして一人づゝ次々と尾根に出てくる。そしてその度にそこに開かれた展望のすばらしさに相和する歡聲が流れていつた。見よ、つつましき十勝、オプタテシケのつらなりを。强烈な太陽の直射に鋭く反映した山々の襞の鮮かな印象は茫然として凝視むる者の心緒をかたく捕へてしまつた。餘りにも華かな現實ではないか。煤煙と阿諛とに黑ずんだ彼の平野の擴りは何處にあるのだ。昨日まで僕等をとらへて放さなかつた因襲の束縛は何處からとけてしまつたんだ。さあこの自由、この清新――私は君とこれを分ちあつてこの處女雪上に亂舞するのを恥ぢない。歌ふ者は大聲に歌つて呉れ。君の腹一ぱいの聲を享受できぬ樣な小さな空は此處にはないのだ。然し吾々は歌ふべき歌を忘れてゐた。そしてそれでよかつたんだ。

十勝の噴煙が夢の樣に消えてゆく。日高の山脈は蜃氣樓の樣に浮んでゐる。そして膨大な針葉樹林は美瑛川と十勝川の大谿谷を眞黑に埋めてゐる。あらゆる大氣の香氣は發散されて、ともすれば私は遠い幻想をしたひ勝ちだつた。その時、尖光の一片が鋭く貫いた。忽然として私は私の姿

に立ち歸つたのだ。峯頂を――峯頂を。私達は長い尾根を歩き出した。スキーをアイゼンにはきかへて、ガサツ、ガサツと一歩づつクラスをこわしてゆく。スキーは肩に擔つた。第二次の食事が、その尾根につき出た岩塔の側でとられる。パンとテルモスの御茶と、ハンブルな食事のいかにうまきことよ。風もない。御天道樣のぬくもりはほか〳〵と脊中から湯氣を立たす。時々音もなく斷崖に沿ふて雪がハラ〳〵と落ちる。それを何氣なくみつめては、皆幸福な笑を放つた。

青氷にたたきつけるピッケルのひらめきは知らない。その頑丈な岩にしがみついて、其の點頂の燈をもぎとらんとする努力もなかつた。死を暗示する山壁の烈風もなかつたそれは麗日を祝福する貧しい彷徨者の一群であつた。氣持よくつきさざるアイゼンの音をしたしみつつ、ゆるやかな尾根の起伏を一つ一つ越えてゆく一群であつた。されど心秘に「頂――頂」とささやいてゐたのだ。

奥硫黄の肩をまはつてトムラウシの山体に入る。スキーをおく。がちや〳〵と歩き出す。巡禮者達にかくして聖堂は近づく。一歩一歩、我が身軀は高まつてゆく。圓錐の尖端は刻々にせばまる。熱いものが、ふと血管にほとばしる。さあ最後だ、一歩、――しかし我々はまざまざと裏切られた。第二の頂上は更に高く彼方にうづくまつてゐる。もう一ふんばりする。アイゼンにのつかつた脚はこはばつてきた。しかも、もう一遍我々はだまされてしまつた。第三の頂上が忽然としてあらはれたのだ。皆の顔が一度に緊張する。泣く思をして皆とは隨分おくれてついてゆく。そして又、その隆起をのぼりつめたとき更に高い隆起を見出した續きやしない。

けれど私は眼をつぶつた。そして靜かに開いた。眼の奥がぐつと熱くなつてくる。あゝかくして我等の視界は總ての方向に自由であつた。何事も語るまい。時計は二時十分を指す。我々はこの峯頂に積むべきケールンを持たなかつたされど、この山頂の尖端に實在するといふ自覺が總てを壓倒してゐた。我々は立つてゐた。十勝川の谿谷の彼方、ニペソツの白姿が森林にぬき出てゐる。そして我々は彼と對立してゐる。

私は峯頂に立つた。しかし何故に山を下降せねばならないのか。

×

薄暗がより沿ふ。山々の陰影が忍びやかに近づいてくる一きはトムラウシの山塊が夕映する。我等の長い直滑走のスプールが斜光の中に消えかゝる。

陽光は次第にうすらいでいつた。そして晴るゝ夜の兆の如く、傾くがまゝにその紅の反映は濃く色彩られていつた煙霧におほはれた平原の小さなうねりの彼方に、暑寒の山々のみが夕陽を浴びてゐる。そしてそれもなくなつた。陽はすでに沒した。ふりかへつて今きた方を見る。されどすでにトムラウシの姿もなかつた。西空の殘紅も夜のとばりにかき消された。そして山々は既に夜の領分へと歩み入つた。闇を通つてスキーの滑走する音が樹林に反響する。ラテルネがたつた一つ悲しくゆれる。その赤い灯をたよりに兩岸の高い谿谷を歩む。その割れた頭上には星屑がわななく。……されど闇は深い。……月光は物靜かに照り出した稍々開けた谿谷を青白く輝かす。スキーの下には摩擦される雪がきしむ。……我等は唯足のむくにまかせる。……何もない。闇も明も、地も空も。……農家の灯がうかぶ。九時十分。

其の夜焚火をかこみつゝ我々は語る何をもつてゐたらう小さな二千米の山、——私は氷河を知らず、雪線を越ゆる山脈を知らない。——唯、二千米のささやかな山を知つてゐる。此處に私の出途を祝福して下さい。彼の我等が尊き先輩のセルヴァンの光輝ある一瞬も私にたえざる刺戟をあたへてくれた。しかし、この小さい出途もたまらなく忘れ難いのだ。——君、私は又此處に歸つてきた。私は過ぎし日をくよ〳〵云ふまい。來るべき日が、そして今此の出途がたまらなくのぞましいのだ。さあ、友達、一緒に出掛けて下さい。

……何時のまにか誰かの肩によりかゝつていびきをかいてゐた。飯を食ふ。御馳走を食ふ。そして甘美な睡りを改めて毛皮の中にはこぶ。

三月二十一日、いよ〳〵お別れだ。小母さんは「皆ゐなくなうて淋しいな」と嘆息する樣に獨語をいふ。私達は白く輝く大雪の山容をみつめてゐる。トムラウシは見えない途中の村で、御稲荷さんの御祭に出會してあんころ餅をもらう。しみじみとうれしい。

（一九二八・二・一四脱稿）

（後記）この一文は三月のトムラウシ岳のスキー登山の記録ですが、もとより純記録的に書く積はありませんでした。書きゆくまゝに當時を追想したまでのことです。山とそして共に登つた友々の快い印象をせめては一行の友に送りたいので書いてみました。私を山に導いて呉れた友や、私と快く山行を共にしてくれた友達――その人々に對して私は友誼といふ言葉をもつてしても説明できぬ、あるしたしみを感ずるのです。そしてこの一文が、そのあるものに對して報ひられるならば、私の悦は此の上ないのです。

そしてもしも、山のすきな方でこの山に何かしらの興味をもたるゝならば、既刊スキー部記念出版に於ける山口君の「オブタテシケ山脈よりトムラウシ山彙へ」の一章によつて春期に於ける、この山を知らるゝことゝ思ひます。且、間もなく發行さるべき山岳部の年報には私と行を共にした坂本君の登山記録と、徳永君の夏期の十勝岳から大雪縱走の記録がのるやうです。もしもこれ等を對稱して讀まるゝならば又興味深いものと思ひます。

なほ參考のため、當時の時間其他を簡單に書きます。

一行、野崎、坂本、渡邊、徳永、佐々、佐山、板橋

一九二七・三・一八。美瑛發前八・一五。俵眞布、中岡氏宅着後四・〇〇。

三・一九（曇・雪）出發前七・四五　硫黄岳頂後一・三五。歸五・四〇。

三・二〇（快晴）出發四・三〇。硫黄東端九・一〇（しばらくしてアイゼンをはきスキーをかつぐ）シーデポット一一・四五。頂上後二・一〇。シーデポット三・三八。一四七三米頂五・二〇。澤七・〇〇。歸九・一〇（同日歸路はトムラウシ岳西にある緩傾斜をすべり一四七三米の頂を通り一一八一米（志比内の地圖）に續く尾根をゆき途中の鞍部より北側の澤に下り俵眞布に出る。）

三・二一　歸札

第二回冬季オリンピック大會

伴　素　彦

毎日よく晴れて、空には一點の雲さへもない日が續いてゐたのに、オリンピックの始まる二月十一日の朝から急に曇つて、入場式の日は私達が瑞西へ來てから始めての吹雪になつた。開會式は午前十時から、アイス・スタヂオン（スケート場）で開かれた。二十五ケ國の國旗が美しく又嚴に吹雪の中にはためいた。私達七人は高橋主將のさゝげる日章旗の下に興奮し乍ら、バンドの奏する音樂に足を合はせ乍ら進んだ獨逸を先頭に二十五ケ國トラックを一週し、それから會長や瑞西の大統領の挨拶後、瑞西の選手でスキーチームの主將格、アイデンベンツが左手に旗をさゝげ乍ら、右手をあげて宣誓をし、又場内を一週し式は閉ぢられた。ジャパン〳〵の聲があちこちからかゝる。東洋から參加したのは日本只一國だからである。何時も太陽の暖く照つてゐるであらうと信じられてゐる日本が、選手を送つてゐるのである。そして又有色人種は日本のみである。人々は好奇の目を見張つたに違ひない。

入場式其の他外の競技とか、サンモーリツツの氣分等はアサヒスポーツ其の他に詳しくのせられてあらうから、私は之から直ちにスキー競技に筆をはこばせて行かう。

二月十二日

Militär Patrouillenlauf (Military Ski race)

參加國獨逸、瑞西、伊太利、チエコスラバキヤ、諾威、芬蘭、ルーマニヤ、佛蘭西、波蘭。距離は三〇粁、各國から四人宛選手を出し、その中の一人は將校で之を引率し、

四人がまとまつてゴールへ入らねばならない。シャモニーの時は射的の點數も競技の結果に關係したのであるが、今年のは只タイムのみである。

普通の競走と違つて大變なのは、軍隊の競走だけあつて持物が規約でチャンと定められてある事である。兵卒は背嚢（大抵の國はリュック・サック）その中にパン、それから鐵砲、藥ゴウを背負ふのが規則である。軍服を着るのは無論の事である。將校は、地圖、ピストルを持つのであるそして此の持物は誰か疲れた場合には外の人が之を背負ふ事を許されてゐる。

競技は午前九時（約）にスタートをきつた。此競走ではスタートとゴールが同一ではなかつた。スタートは五〇米以上高い處にあつた。始めに大きな出を（スタートは此の中腹にある）登つて、それからドンと降りてサマディンへ到り、だら〳〵登りでセレリナに至り、又登つてスターツエル・ゼーを渡り、マイエライを通つてサンモーリツツ湖の横の山の腹を拔いてHotel du Lacの上に出るのがコース、ノールウエー側に言はせると前半はスキーのコースではないと言つてゐる。又ある側から言はせると、瑞西に甚だ有利なコースださうである。前半にウント登つて、ドンと降りるのを指すのであらう。

此の前のシャモニーの大會では、瑞西が優勝した兵卒の中には、そのときの連中が殘つてゐる。二度目の優勝をと彼等は野心に燃えてゐたであらう。北の覇者ノールウエーはライスタッド以下の强者が始めて參加した。勝はノールウエーか、瑞西か。

戰は始まつた。軍隊の競走だから文字通り戰である。前半サマディンに到るまでは、俄然芬蘭が優勢である。平地のみに强いと言はれた芬蘭がである。彼等のストックを見よ、スキーを見よ。最も長かつたと稱せられる芬蘭は最も短い杖を用ひてゐる。スキーも短い。芬蘭の强いのは最早平地のみでは決してない。

或は芬蘭が勝つかとも思はれた此の競走もゴールでは結局ノールウエーが勝と定つた。矢張ノールウエーかなと私達は思つた、矢張强いんだなと思つた。次は芬蘭、三十秒遲れて瑞西、それから伊太利、獨逸、チエコの順、佛蘭西ルーマニヤは暫くたつてから歸つて來た。

此の競走で感ずることは、諾威、チエコを除いては兵卒

に比べて將校のおちる事である。持物が輕くつてまだおちるのである。將校がブレーキを務めるのである。瑞西なんかでは普通の競走をやると將校はグッと一段落ちるさうである。將校の來るのを待ち〳〵來るのでは勝てつこはない。その點から言ふと諸威はしつかりしてゐる。將校ライスタッドが先頭になつて、終始一緒になつて來た。力が平均してゐるのである。チェコの將校は之が又大變強く兵卒の鐵砲二つを背負つて、最後から兵卒を追ひまくつてゐた。後で聞けば五〇粁か、十八粁で活躍した Nemecky ださうである。成程と思つた。

結果から言ふと北歐が矢張强かつた。瑞西が芬蘭に二七秒負けたのは如何にも殘念であつたらう。將校が今一寸頑張れば勝てたのだから。ノールウエーは芬蘭より三分一五秒早い。此位の選手は本國には澤山ゐて選拔に苦しんださうである。私達を後でコーチしてくれた諸威人リスレガルドを十月頃からわざ〳〵トレイナーに呼んだ伊太利は、チエコ、獨逸を抑えて四等になつた。アルプス聯隊の連中である。

私は後半の一部分しか見ないからよくは解らないが、三〇粁の記錄が三時間五〇分四七秒（雪はいゝ雪）である事から察しても解る樣に、スピードはゆつくりしたものである。途中で遲れたのを待つたり、他人の荷物を背負つてやつたりしてゐる。それでゐて皆へト〳〵になつてゐる。あれだけの物をになふのであるから無理はない。

Samadin

1. Norwegen 2. 38. 00
2. Schweiz 2. 38. 00
3. Finland 2. 41. 03
4. Italien 2. 44. 00
5. Deutchland 2. 53. 00
6. Tchechoslowakei 2. 55. 00
7. Polen 2. 58. 25

Fuorcla Saluver.

1. Finland 1. 50. 00
2. Schweiz 2. 02. 00
3. Norwegen 2. 02. 22
4. Italien 2. 04. 15
5. Tchechoslowakei 2. 07. 6
6. Polen 2. 11. 00
7. Deutchland 2. 11. 30
8. Frankreich 2. 35. 00
9. Rumänien 2. 35. 33

Post Fuorcla schlattain

1. Finland. 1. 20. 12
2. Schweiz 1. 24. 20
3. Norwegen 1. 25. 20
4. Italien 1. 25. 32
5. Polen 1. 27. 19
6. Tchechoslowakei 1. 27. 25
7. Deutchland 1. 29. 15
8. Rumänien 1. 40. 00
9. Fravkreich 1. 41. 40

Resultate

1. Norwegen 3.50.47
2. Finland 3.54.37
3. Schweig 3.55.04
4. Italien 4.07.30
5. Deutchland 4.15.02 1/2
6. Tchechoslowakei 4.15.07
7. Polen 4.33.45
8. Rumänien
9. Frankreich

二月十四日

昨日晝間から夜にかけて新雪が、三、四寸積つた。七時頃雨だれが落ちてゐる。温度プラス一度、此んな暖いのは初である。ワックスが難しい。日本の選手は何しろ五〇粁を走るのは始めてゞある。大分苦心した樣である。向ひの宿屋の瑞典はクリスタルみたいなものを塗つて、それを火で燒いてゐた。

午前八時スタート。一分おきスタート

此の新しい雪が、非常に色々の場所を通るであらう五〇粁の間に如何に變化するだらうか。

コースは山間の湖水二つの周圍をめぐる楕圓で途中只一つ彼のシユナイダーが活動寫眞をとつたフエツキス谷へ入るだけであるが登りの甚だ多いつらいコースださうである私はスタートで日本の選手がスタートしてしまつてから自動車でフエツキス谷へ行つた。フエツキス谷へ入る點が二十九粁、出る點が三十八粁で丁度クロツスしてゐる。此の二十九粁と三十八粁の間は半分は小川の左を左山のゝぼり但し急ではない。歸りはその反對を大した急斜面のない左山、此の谷で勝負が定ると或る人はいつた。

此の谷へ來る途中に選手の走るのが見えた。五〇粁と云ふと初めはゆつくり行くかと思ふと誤である。早い人は始めからドン〳〵走つて行く。北歐の人達はすぐに他國を拔いてゐる。

日本の選手達も番號が狂つてゐる。早い人と遲い人では記錄が隨分違ふのであるから、始めから早い人はドン〳〵拔いて行く譯である。日本の選手と一等になつたHedlundとは一粁平均一分二〇秒程（最も成績のいゝ永田君と）違ふから初からスピードは異る筈である。

私の見てゐた所は三十二粁邊である。コースには多くの小さな赤旗と粁を示す札が立つてゐる。臺かとも思はれた今日、太陽が強くはないがよく照らしてゐる。フエツキス谷はすつかり照らされてゐる。選手の來るのを待つてゐる間に雪質がどん〳〵變つて行く。私のスキーにはミツクス

が塗つてあつたが、來るときはよく利いてゐたのに、待つてゐる中に雪が水氣を含んで來てくつゝきだした。

八時にスタートだから、もう來さうだと思ふのに仲々來ない。此の調子だと四時間では走れないだらう。來るのはノールウエーかフィンランドか。

十一時五五分頃、一人が見えた。一緒にゐたスウエーデンの選手があわてゝ用意をした。來るのは6の番號をつけたスウエーデンの Jonson である。彼は私達と一緒に應援に來てゐるスウエーデンの選手が怪我をしたので補缺に出たのである。バナナを食つて何かワックスを塗つて貰つて悠々休んでゐる。その中に白裝束の Hedlund が大きな体を表はす。番號から云ふと Hedlund は大分勝つてゐる。後には暫く誰も來ない。殆ど同時に二人出發する。此ではどうしても瑞典の優勝である。Kjellboton はどうした Hegge は未だか。

その中に Kjellboton が勢よくスキーのテールをあげてどん〳〵飛んでくる。Hegge が來た、Lappalainen が來た。然し彼等は、瑞典には遠く及ばない。瑞典の Andersson が又大變いゝ。その中に、向ひ側のスロープを Hedlund が Jonson を大分離して大きなピッチで一歩〳〵滑つて行く。瑞典の選手は大体にスキーを雪面から離さないで、力強く一歩〳〵滑つてゐる。三段滑走、二段滑走はあまりやらない樣である。Hedlund のストライドは實に力強く大きい。今でも目に鮮にうつる樣である。瑞典に比してノールウエーの走り方は又變つてゐる。彼等はテールをあげる。どん〳〵走る。Kjellboton 等は隨分ピッチも早い。あんなに走つて五〇粁を通すのだから驚く。Kjellboton に比べると、Hegge は大分をとなしい走り方をする。ノールウエーはワックスを失敗したらしい。Hegge は私達の所でナイフを借りて、厚く塗つたワックスをゝとして行つた。大勢が不利な事を知つたのであらう。Kjellboton も Hegge も、どことなく覇氣がない樣に見えた。瑞典は益々早い。二人の Lappalainen も來た。優勝圏内からは離れてゐる。芬蘭の杖は實に短い、一番短い、此には驚いた。スキーも短い。重に樺で輕い（と云つても日本の程輕くはない）スキーの短いので思ひ出したが、スウエーデンも決して長くはなかつた。そして何かドロ〳〵したワックス（多分クリスタル）を厚く塗つてゐた。日本の選手は大分おくれて一時頃に最初に永

田君が來た。此のまゝ行けば相當の所へ行ける。竹節君、高橋君が來た。永田君が一番いゝ。然し隨分疲れてゐるらしかつた。かう雪が惡くなつては日本人は身体が惡いから甚だ損である。初めて走る五〇粁に三人の健闘は實に偉いと思つた。麻生君は身体の具合が甚だ惡く遂に棄權した。誠に殘念であつた。全瑞西大會の成績から我々の期待する所が多かつたのに。

雪質が惡いので止めた人が甚だ多かつた。

フランスは全部やめたらしい。

日本の選手をおくつてからゴールへ歸る。永田君以下がゴールインするのに間に合つた。滿場の大拍手の中に先づ永田君が歸つてくる。疲勞してすつかりやせてゐる。こんなに顔まで變るものか、日本人の中でも比較的身体のよくない永田君の奮闘は皆の賞讃のまととなつた。竹節、高橋君もつゞいて歸る。皆初めての五〇粁に此の天候なので、大分疲れたらしかつた。

結果は矢張瑞典の優勝と定つた。

1. P. E. Hedlund, Schweden 4. 52. 37
2. Gustaov Jonson, 〃 5. 05. 30
3. Volger Andersson, Schweden 5. 05. 46
4. Olab Kjellboton, Norwegen 5. 14. 32
5. Ole Hegge, 〃 5. 17. 58
6. Tauno Lappalainen, Finland 5. 18. 33
7. Anders Ström, Schweden 5. 21. 54
8. Johan Söa, Norwegen 5. 25. 30
9. Martti Lappalainen, Finland 5. 30. 09
10. Otto wahl, Deutchland 5. 34. 02
11. Joseph Nemecki, Tchechoslowakei 5. 35. 46
12. Hans Bauer, Deutchland 5. 36. 21
13. Anderezj Krzeptowski 5. 36. 55
14. Franz Donth, Tchechoslowakei 5. 37. 36
15. Walter Bussmann, Schweiz 5. 38. 49
16. Fritz Pellkofer, Deutchland 5. 41. 00
17. Robert Wampfler, Schweiz 5. 42. 40
18. Yenzel Fisera, Tchechoslowakei 5. 42. 55
19. Josef Bujak, Polen 5. 44. 19
20. Matteo Demetz Italien 5. 47. 47
21. Ferd. Gluck, 〃 5. 49. 52
22. Carlo Gourloueu, Schweiz 5. 55. 09
23. Jansa Josko Jugoslavien 5. 58. 09
24. 永田實 日本 6. 02. 42
25. 高橋明 〃 6. 05. 42
26. 竹節作太 〃 6. 08. 50
27. Franciszek Kawa, Polen 6. 11. 08
28. Stane Kmet, Jugoslavien 6. 32. 07
29. Janko Jansa, 〃 6. 34. 59
30. Stane Bervar, 〃 6. 46. 48

瑞典は、シャモニーの覇者ノールウエーを破り一一一三

等を占めた。大勝利である。我々は全く豫想を裏切られた。大概はノールウエーで、さもなければ、芬蘭であらうと思つてゐたのに、瑞典が斷然抑へてしまつた。瑞典は永年の望を果してその喜び例へ難いものがあつたであらう。ノールウエーの破れたのはワックスを誤つた爲であらうか。後にホルメンユーレンでFinlandのLappalainenが勝つた！今年のノールウエーの五〇粁は全滅である。

一等から九等まで全部北歐諸國に占められてゐるのは、依然中歐は未だ〳〵だと感ぜさせます。

獨逸、チエコ、シユワイツ皆一段落ちる。走り方を見てゐても、あか抜けしてゐない。シユワイツあたりには日本はあまり落ちない。始めてスキーの本場へ、どの位進んでゐるかと來てみたが、日本はよく獨力でこゝまで來たと思はれる。我田引水の樣だけれど。此でノールウエー邊で一年程習つたら日本人はいい所へ行けると思ふが。それにつけても殘念なのは日本があまりに遠いことである。中歐でも大概の國は少くも一度はノールウエーのコーチをうけてゐる。伊太利、フランス、ポーランドは今年はノールウエー人のトレイナーをよんだ。トレイナーをよばなくても、うまい人のを見てゐればぐんと違ふ。ほんとの走り方はどんなものだか、始めてみたから今後の日本は大いに前進するだらう。

以上簡單ながら五〇粁を終はる。

春の Paradies Hütte に於ける Training

村本金彌

我々がスキーの王國と尊敬もし亦憧れてゐた Norway のスキー年報たる AARBOK を手に入れたのは確か一九二二年度のものだと思ふ。そして其の本が手に入つた事は我々にとつては實に山でも手に入つたと同樣な嬉しさと感激とをもつて、御互ひに人の見てゐるのをひつたくらんばかりにして、あかず見入つて其の鮮かな、しかも豪壯な飛躍振りや、如何にも力强く、且つ調和のとれた Dauer lauf に於ける走法に驚き入つた次第であつた。其の年から年々に AARBOK が手に入つて來たが一九二三年度のものであつたと思ふ。Sprung の寫眞が澤山出てゐる中に一つの異なつた Style を見つけた。それは空中に於いて上体を腰から曲げて如何にも悠々とした感じのする Style であつた。そしてそれを見ても吾々は當時 Carlsen の飛躍振りを神樣の樣に心得て居つたので、彼の飛躍振りのあまりの美しさに幻惑されてか、只奇妙な Style で飛んで居るなといふ感じ丈であつた。爾來年報が手に入つて來たが何れの場合のを見ても空中に於いて、上体を折り曲げた樣な Style が增して來て、其の中でも際立つて美しく折り曲げられてゐるのがあつて、吾々の目を瞠らしめた。そしてそれが當時から早くも Norway 語を研究してゐた我々の先輩廣田氏に依つて Holmenkolen のジャンプの優勝者たる Tullin Thams であると言ふ事が解つたのであつた。彼は當時、貧弱な見界よりもつてゐない吾々にとつて從來の飛躍法に一大革命を起さしめ現在では吾々の憧れの的となつてゐる Tullin Tham

ではなかつたのであるが、然し一九二四年 Chamonix で行はれた第一回万國オリンピックスキー競技會ジャンプに於いて斷然第一等の榮譽を得た事を新聞で知つたり亦當時の朝日スポーツに依つて彼の飛躍振りを紹介されてから、我々の憧れは早速此の世界の第一人者に向けられたのである。そして亦如何にしたら、あんなに空中で上体が曲げられるのだらうか、又よくもあんなに空中で手の先がスキーの先端にまで屆く位に迄曲げられるものだと實に驚歎するより他はなかつた。そして世界の第一人者の眞似なりともして飛んで見たいものだと考へて居たが、何故に上体を空中で曲げてゐるのか亦何故に吾々の目から危險に感ぜらるゝ位に Vorlage を強くしなければならないのか充分それに對する Theorie が解らなかつた時であつたので、それよりもむしろ今迄の一流選手の行つてゐるあの胸を張り出した、伸び切つた Style が非常に良いと考へられ、勿論現在でも非常によいのであるが、そこに迷ひが生じて來た。そして眞似をするにも如何にして成すべきかは雪が降り始めると色々な不都合の爲めに思ひ切つて Style を變へたり、それを練習する大膽さを缺いてゐたのであつた。そして何時か充分練習すべき好機會を望んで止まなかつた。其の中に吾々の先輩木原さんが Norway にいつて、スキー競技者にとつては憧れの的たる Holmenkolen の大會を見て來られ、當時の寫眞や又向ふにおられる間、色々と御指導の御便りを下さつたのを見たり、又我々の仲間たる青木君が Schweiz の Jahr Buch の中より Straumann と云ふ理學士が所謂タムス式の飛躍法を Aerodynamisch に說明してあるのを飜譯してくれたので、吾々にとつて充分その Theorie なるものが了解されたのである。此の點に於いて吾々は早くも此の方面を研究され色々と御指導下さつた木原さん、廣田さん並に青木君には深く感謝して止まない次第である。

が、然し以前申した通り充分の練習する機會がなかつたので、あの貴重なる研究は今迄只徒らに机上におかれてゐた事は吾々斯道に志す者にとつては、實に御恥かしい次第であつたが、愈々我々も第二回オリンピックスキー競技に廣田、伴の二氏を送り彼等の得て來る尊い經驗を受け入れて、之を咀嚼し、そして行詰つてゐる飛躍法に一大改革を與へなければならない時機になつたのである。

愈々學年末の試驗が始まる頃だつたか、其の道の好きな連中が集まつてストーブを圍みながら段々汚なく、そうして減つて行く雪を眺めて悲觀したり、幾分萎縮した筋肉をたゝいては來る可き Season の活躍を胸に畫いたり、樂しく駄辯つて居たが、話の落ちはどうしても本年度の中にあの Aerodynamisch な Form を練習しておいて、派遣選手が歸朝して色んな指導がある筈であるから、それを幾分なりとも受け入れ易くしておく準備をしておかなければならぬ。それには丁度 Paradies Hütte の附近は雪もまだ充分良く二十米位飛べる Schanze は作られるから、其處でどんな事をしても所謂タムス型を練習しようぢやないか、それと同時に Langlauf の方もコースは充分とれるから一つ同志の者共があつまり二週間の Training を Systematisch にやつて見樣ぢやないかと、話しは早速まとまり三月廿二日から各自食糧を持參して自炊しながら Training をやる事になつた。一行は杉村、神澤、宮下、長田、山田、吉田、入江、宮村黑田、それに舊東京藥專にゐて活躍された秋野君、並びに舊法政大學スキー部の主將であつた長田君と、商大水泳部の猛者で北海道の雪を享樂に來た阿部君などが加はり、町の土塵りを他に Paradies Hütte に集つて來た。早速 Schanze を作り、構造は Anlauf の距離を長くし傾斜を幾分緩にとり Satz に於ける動作に對して充分の意識と餘裕を持たしめる樣にした。シャンツェの傾斜は稍水平にし高さ一米半、Aufsprungbahn は始めは強い Vorlage に對し充分なる傾斜を保たせたかつたが地勢の關係上、我々の手に依つては到底造る事が出來ないで二十二度位で我慢しなければならなかつたが、其の他の點は私共にとつては總て好都合な狀態であつた。

試飛を試みた所二十米位は樂に出るので皆んな大喜び新しく之から飛躍を試みんとする者も、今迄にやつてゐた古い連中も尋常一年生の樣な Frei な氣持で、其の中にも更に新しい目的に對して何事かをしつかりとつかもうとする熱烈な希望に燃へてゐる事は見逃がす事の出來ない事實であつた。

最初に採つた手段は Satz に於いて既に上体を折り曲げ且つ充分の Vorlage を保たせ、其の姿勢のまゝ Aufsprung 迄我張り續ける事にした。そして木原さんが寫眞で說明して下すつた通り、後から見た場合には成る可く、尻丈が見へ

て頭が見へない位を良い事にし、又側面から見ては上体が腰から折り曲げられてゐる事を第一條件に、それにつれて体の充分なる Vorlage に嚴重に注意し合ふ事にした。

之からは皆んな初心者となつてやるのだから實に愉快だそして實に朗かだ。此處に吾々の練習せんとする Form を Flams の名にちなんで「タムル」と言ふ名稱を附す事にした。

神澤、杉村の古株の一年生から練習を開始し出しは充分「タムッ」て行くが、それもほんの束の間直ぐ古い Style になつてしまふ。それでも飛んでゐる方では充分タムッたと思ひ込んで下から嬉しさうに「どうだい、タムッたらう」なんて上つて來て色々と苦言を呈せられて苦虫をつぶすのもある。其の中に新進の宮村が飛んであつさりとタムッて他から見て何んの Shock も感ぜられない位あつさりと飛んで見せたので見てゐる者喜ぶまい事か、おまけに刺激されて、然らば俺もと勇んで Start につく始末、最初の御手柄は宮村の占むる所となる。やがて夕陽が手稻の雪に赤く映ゆる頃、最初の練習に興奮した面持で Hütte を目指して歸つた。

腹は充分に減つてゐる。然し誰れも不平一ついはずに默々と働くので、また〻く間に食事の用意が出來る。ランプを燈した下で樂しい夕食をばくつく。一日の勞働につかれた身体を恢復する爲めの又明日の練習に對するエネルギーを貯ふべく各自猛烈な食ひ振りには驚くばかり。それがすむと各自愉快に或ひは食器を洗つたり或ひは室を掃除したり或は夜の薪を切つたり實に善く働く。山に來る者少なくとも之の Hütte に住む者、之の Training に集つた者に我利々々考へをいだくものはなく總てが朗かだ。

やがて後始末が出來ると下の室のストーブを圍んで色々な話をする者、柱に向つて飛びついてタムリ方の練習をする者樣々だ。話は自然今日より始めた「タムル」事に占められてゐる。事實タムル事は今迄の飛躍法よりも悠々たる感じを與へ Aufsprung が非常に樂に出來る事は事實だ明日の練習を樂しんで皆寢につく。

午前五時頃には皆んな目を覺ます。昨夜早く飯を喰つたので腹が猛烈に減る。朝起きて働く都合上一寸パンを喰ふ朝飯が八時、それがすむと皆んな一樣にスキーにバラフィンを塗る。春なので燒ごてで充分塗る。塗蠟がをはると

皆んな今日シャンツエへ行つて自分が爲さなければならない點や、亦昨日の飛躍に於いて得た善い經驗をば本日は一層伸してやらうと張り切つて練習場に向ふ。

昨日より幾分タムル事に慣れた樣だ。皆んな轉んでも立つても下から大きな聲で「先生、どうだい今のはタムツたかい」と大聲でどなる。上の方では先生になつた者は「善し」とか「駄目」とかの斷定を與へる。頭をかきながら上つてくるもの、嬉しさのあまり微笑を禁じ得ずにニコ〳〵して上つて來るもの種々樣々。本日の成績では宮村が一番よくタムル、古い者顏色なし。それに Langlauf の長田、山田、吉田、入江、宮下などが飛躍を試みて鮮かに立つて行く我張りは物凄い。

練習が終つてからは今迄荒した Bahn を踏みかためたり均らしたりして歸る。

夕方になるとザラメが氷つて實によくすべる。Hütte へ歸ると誰やら有志の人が夕飯の仕度をしてゐらしい。煙がんに上つてゐる。急に空腹を感ずる。でも皆元氣に薪を切つたり水をくんだりする。やがて樂しい夕飯がすむと、階下の室で長田さんの兄樣が先生になり踊りを初める。一日のつかれも爲に慰やされる。上では二、三人深い睡りに落ちて居る者もゐる。

三日目あたりから大抵の者はタムル事が出來る樣になり特に神澤は Satz の時からタムラずに踏切りの當初は充分今迄の如く伸びた姿勢で Flight に三分一位出てから漸次タムル樣に練習をし初める。此れは力强い Satz をして、それからタムルので吾々の理想としてゐる所である。とにかく之のタムル事に於いて注意すべき事は背中が所謂猫背なる事と、曲げんとする爲めに足が縮む傾向がある事である。そしてタムツて一番良いと感ずる事は悠々たる飛躍が出來る事と同時に Vorlage が强くなつて、所謂 Aerodynamisch になる爲め身体が浮く樣になり Aufsprung は今迄の Teilesprung に比べて猛烈 Shock が少なく、Aufsprung が樂に出來る事である。

一週間目頃にはジャンパーは皆タムル事を覺えて無意識に Satz をしても既にタムル樣になつた事は實に嬉しかつた。依然として宮村のタムリ方は光つてゐる。神澤のタムリ方も追々と板に付いて來る樣になつた。

毎日々々二五—三〇本迄も飛んで一日も休みをとらなか

つたので体が猛烈につかれてゐる。そして幾分タムル事に對して無關心になつて來た傾向が見えて來た。

四月の五日であつたか猛烈に体がつかれてゐるのと、朝から霧が降つて來たので、皆んな今日は休まうと期せずして二階にごろ〳〵してゐたが、丁度階下でスケートの選手の後藤君が來て居て色々話し込んでゐる内にスケートも矢張り一流の者になるとAerobaynamisch なFormで滑走する樣になるらしいとの話し、感激オンチばかりなので早速刺激されて体のつかれも何にも忘れて早速Schanze へ向ふ。そして此の一日が又我々にとつて非常に尊い一日でした。そして今迄出來なかつた人々も完全にタムリ方を覺えて皆んな喜んで歸つて來た。そして其の晩は秋野君の自慢の料理ポークカツに舌鼓を打ち、せつせと擔ぎ上げた蓄音機をかけて斷然氣分を出す。其の次の日から、いはゆる仕上げの練習とも云ふべきか今迄に無理のある所を圓滑にし、タムル事を板につける樣な練習となつて行つた。

其の内に日數が立ち雪も惡くなり千尺高地から下は雪がなくなりかけたのでいよ〳〵なつかしいSchanze なつかしいHutte に別れを告げなければならない日が來た。四月八日我々は此の實に有意義な二週間の生活から離れたのである。

重いスキーを肩にかつぎ輕川へ下つた。途中雪が少くなく町へ下りて見たら全然雪がなく、土ぼこりが立つてゐる末だ柔い草の上をごつついスキー靴でふみしめながら歩いて行く氣持は實になんとも云へない感じだ。秋野君が大きな聲で「一生の感激だ」とどなる。

吾々の練習して來た方法は或ひは外國の選手が行つてゐる練習法とは全然違なるものかもしれない。この事は派遣選手が歸つて來りや直ぐ了解さる事ではあるが少なくとも吾々は今迄吾々の尊い先人の研究や又現在の者が色々と努力して得た經驗を基として行つたのであるから、派遣選手が得て來た尊い經驗を受け入れ易くする一助となつてゐる事は信じて疑はないものである。

Sigmund rund

海外通信

×

競技が終つてからの話であつたが、コースは割合に難しいコースで上り下り共に屈曲多く、日本の様な大マカな下りが割合に少ないと云つて居た。然しコースのマークが五〇米隔位に立つて居て赤、黄、青で區制し赤はコース、黄は危險、青はコントロールポストについて居たのは非常に安心して滑れたと云つて居た。平地は全距離を通じて二百米位で、完全に平地ではなく八度前後の緩斜面であつた。上、下、平三分率はどうも見受けられなかつた様である。標高差の考へ方は日本の在來のと違つて居た様である。即ち、上りコースだけを打算する様である。

例へば一〇〇〇米でスタートしたとすると、上りを合せて二二五米の標高差として表はす譯である。尤もこの話はノールウエー學生スキー聯盟代表さんから聞いた話である。

滑走テクニックは、三段滑走の要領が少し變つて居る様にレスリガード君から聞いた。その方法は腰を低くして体を押した方が良いか、腰を高くして居た方が良いか疑問ではあるが、之は尙研究の余地が充分あると皆が言つて居るやうである。

×

競技第二日目は滑降競走、一分隔にスタートさす。此競技では他國の選手は皆普通の滑降スキーを穿いて居た。友はラングラウフシーで出場した。之を見て他國選手は大へん驚いて居た。といふのは歐洲では下降競技にラングラウフシーなど用ひずに、普通のスキーを使用するんだ相である。ノールウエー、スウエデンは出場しなかつた。流石はスキーの王國であると思つた。滑降競技などは彼等はスキースポーツとして重要視して居ないとのことである。

スタートは一分隔であつた。四番目に出た永田君が一番最初にゴールインしたので、競技場をワン〳〵うならせた。そして矢澤君が十六番目にスタートして十二番目にゴールインした。

又今日も日本の名を擧げた譯である。

ゴールに入る人何れもが、とても偉く眞白になつて來たのを見ても如何にコースが困難であるかは察せられた。

今日も兎に角私達は相當の成績をあげ得た。

スイスなどは、已にこの滑降競技のトレーニングをやつて來たと云ふんで流石に旨い。然し私達仲間も練習さへしたならば大丈夫優勝し得ると思はれる。

而し私達が日本スキー界を代表して來て、始めての歐洲でのスキー競技會で僅に二週に足らざる練習で、健闘の友を得た喜びは永久に私達の記錄に殘つて消えぬことであらう。私は外國のスキー場で日章旗をつけた友がゴールに入つて來た時、あふれんばかりの外人の歡聲を聞いた時本當に感激と喜悅に浦ちて、思はずホロリと感涙の落ちるを感ぜざるを得なかつた。

私達には、あとスラロームとジャムプの二つの競技が殘されて居るのみである。たゞ私達のもう少し學ぶべきことは滑降に於て所謂ホッケ委勢ではないかと思ふ。

伴はもう此處へ來てから三〇米は樂に飛ぶ樣になつた。先日も練習で三五米を鮮かに立つて居る。ジャムプも大へん調子が良いことを母國の人達に告げやう。

あと二つの競技の成績を期して此度の喜びの筆を擱かう。

×

一月廿九日(日)　晴

寒からず亦左程にも暖い日でもなく曇てあつた。午後二時半よりジャムプ競技開始。

ジャムプ競技は、複合競技の種目としてのジャムプを先に、次はジャムプ競技のみのものを行ふことになつた。ジャムプの競技について書く前に一言せねばならないことがある。勿論そのことは私には無關係のことではあつたが、今度の學生競技にはノールウエー側の提唱で、コンバインド競技が附屬競技として附加せらるゝことになつたのである。

尤も此競技種目は、ノールウエーが此種目を入れることを條件として此大會に出場することになつたのださうである。で少し私達にも野心が出て、十六粁のディスタンスで第六位の成績を得た竹節君を申込むことにした。

スラローム競技は青族と赤族と立てゝあつて、二本の青族に必ず兩足が通過せねばならないのであるし、赤族に一足でも宜しいのであつた。處が、スウイスの學生でスラローム一着になつたRoch といふのと、二等になつた Cristomanno といふのとがゴールインの青族をまたいで片足だけ通過したのであつたが、スウイスの學生スキー聯盟會長 Guetner 氏とイタリーのスキークラブの人達と互協して不正ともなかつたので、余程抗議を申出樣かと思つたが、どうせあちらは牛耳つて居る連中のことであるし、且又こんな處で惡感情抱かせても、それに又抗議したからとて大したことでもないしと思つてだまつて泣き寢入りした。意氣地ないやうではあるが全く止むを得ないのであつた。

流石はノールウエー、スウエーデンは偉いと思つた。こんな競技はスキー競技の末と考へて居る處に偉さがある。スラローム競技のことは此處では此位に筆を棄てる。

ジャムピングヒルは、ノールウエーの選手がやつて來てから、實はすつかりシャンツエとアンラウフとの績きが修理されて、飛ぶのにも大分樂なシャンツエになつたことは事實であつた。

ジャムピングヒルの飾附の處には各國の國旗が、スタンドを埋めて大へん美しく飾られて居た。

外國での競技會で日章旗を見るのは、何時の場合にも外國に來て居る同胞に言ひ表せない印象を與へることを聞いて居たが、實際シミ〴〵となつかしさを覺える。

定時より遲れて午後三時から開始。

シャンツエに北向斜面にあつて森の間を切開いて作つてある。で日が西へ廻ると薄暗くはあるが、斜面のコンディションは比較的何時も良コンディションにある。

此日、伴君は大へんコンディション良く、第一回目に三十八米

飛んで樂に立つた。此分ならと重みは充分あつた。

競技は始めコンバインドの人達のジャムプが二回、次にジャムプのみのものが二回飛んだ。成績は次の如し。

		note	metre			
(1) Heiberg	(Norway)	18.498	41.5	47.5		
(2) Bernsten	(〃)	18.337	44.5	46.5		
(3) Benterud	(〃)	17.353	43.5	42.0		
(4) Meisser	(schweiz)	16.337	39.0	39.5		
(5) Thrane	(Norway)	15.780	37.0	38.0		
(6) With	(Norway)	15.232	35.0	37.0		

で伴君は一回目 38m 飛んで見事に立つた。思はず Bravo を叫んだ。僕は計測係にされちつて 40—50m の間を受け持つて居たが實際嬉しかつた。此時の Satz は割合に良かつたと思つた。Flight でも體は伸びて居た。距離の遠くへ行かなかつたのは、第一回目であつたことにも原因したが Satz が弱いことはたしかである。二回目の round でサッツで搖れて偉く危い姿勢で轉んだ。その時は見物人皆が顏の色を變へて居た。何しろ 41m 位の處へ "Auch ein Sprung" の形で落ちたからたまらない。幸ひケガをせずにすんだからよかつた。

此 Sprung allein で得た觀察ではあるが、外國ではどうも距離を多く飛んで立つことを心掛けてゐるやうである。實際 Form は第二であると思つて練習することが第一に大切だ。kombiniert の Sprung では Sweden の Moberg といふのが第一位になつた。そして竹節君は二回飛んで立つて七等になつた。成績を記さう。

	Langlauf(16k·m)	Sprung	Spr. länge m	Endonote
1. Moberg (Sweden)	15.750	17.250	42.40	16.500
2. Bernsten(Norway)	14.625	18.291	43.42	16.458
3. Heiberg (〃)	15.125	17.750	40.45	16.437
4. Benterud(〃)	14.500	17.250	41.41	15.850
5. With (〃)	18.500	13.166	26.25	15.833
7. 竹 節 (日本)	16.500	9.410	25.23	12.955

start punkt は勝手であつたから Rekord は開きがあるが、然し同じ處から出ても Norway. Sweden の選手には他の國の選手は一歩をゆづつて居た。その要點は Satz にある。

Sweden の選手の Moberg といふのにも聞いたし又 Bernsten にも聞いたが、Satz は爪先で踏み切らずに必ず足底全體で踏み切ると言つて居た。そして空中へ體を前傾にして投げるといふのである。さう言つても判らない。空中へ飛び込んで行く氣持と言つた方が良い。Landing はやつぱり前足に大部分のショックを受けるのが正しいらしい。Flight で前傾になる工合は Pendelevegung の氣持を應用して意識的にやると言つて居た。

夕暗の深む頃競技は無事終了した。

夜八時から賞品授與式が Grand Hotel Sanoy であつた。日本選手が此處でも非常な人氣の焦點であつた。

Desert に入つてから各國の學生スキー團の會長が此大會の盛會であつた御禮の言葉をした。日本もやらうといふ譯で皆にすゝめ

られて私は立つた。Japan, Japone, Giapp と四方から叫ばれ、そして滿堂數百の人達の拍手の内に起立した。

實は昨晩こんなことがあるかと思つて、昨晩ドイツ語の挨拶の文句を作つて置いて、ポケットに紙切れをひそめて置いたが皆が日本語であれとすゝめる、僅に出始めに Ich habe in Japan meine Deutsche Sgrache gelernt deshalb Sehr grob. Bitte/es Vergeihen Sie das darf ich mich mit Japanischen Sprache Zu ercklären Alle Herren und Damen とやつて判りつこない日本語で挨拶した。處が却つて非常に interesant だと歡迎されちやつたには實に閉口した。

かうして私達は大へんな歡待と好印象を Italie の人達始め他國の選手に與へて Italie の日程を終へた次第である。

再度私は歐洲での日本スキー界生粋の選手が一入賞の光榮を得たと次の奮闘と、そしてその美しい記錄に對してスキーの美しい言葉 Ski Heil! を。

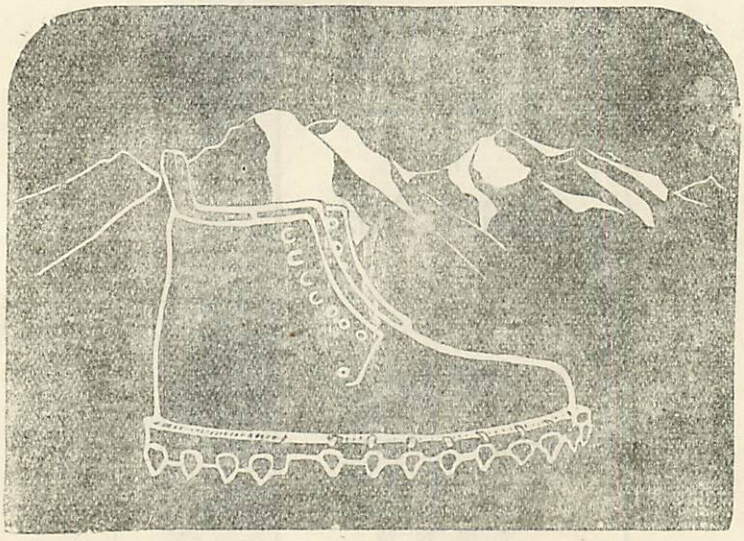
以て Italie での筆を一先づ擱く。(St. Moritz にて　廣田生)

◇御　斷　り

三月下旬發行の豫定でありました岡村源太郎遺稿集は、編輯の都合により止むを得ず來月に出版延期になりました。惡しからず御諒承下さい。

SKI HEIL
スキー
ト
其用具全般
中野商店
ツバメ印スキー
斯界第一
大量製産
札幌

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ
一等賞金牌受領



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角
太田屋靴店
電話小石川四七一二番
振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定價 金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六册分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

昭和三年四月廿八日印刷
昭和三年五月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　井出英次
印刷兼發行者　小川玄一
印刷所　札幌印刷株式會社
北海道札幌市北一條西二丁目
發行所　山とスキーの會
北海道札幌市北四條西十二丁目一番地
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo
No. 81. majo 1928. Sapporo. Japanujo.

大正十二年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和三年四月二十八日印刷納本
昭和三年五月一日發行

美滿津特製

春山・夏山・冬山の道具！

テント・畳込ストーブ・ピッケル・ザイル・
リユックザック・ラテルネ其他・等・等・等
夏スキー・山スキー

合名會社
美滿津商店
東京・本郷・赤門前
電話（小石川）八四五・二〇七一

山とスキー 第八十一號

定價金參拾錢